

夏の向いづく

暑い夏。少しでも快適に過ごすための「もしも買い替えが許されるとしたら」という家電オールのスターズのラインナップを話しあったことがある。エアコンなら内部クリーニング機能が、やさしい気流のあのシリーズ。浴室・脱衣所の除湿機は静音・軽量設計で放熱量の少ないあのメーカー、などの話だ。



「もしかして秋葉原で働いていたのか?」と思わせる同僚もいて、その彼に実勢価格を提示されると、皆遠くを見るような目になり、家電ミーティングも終わった。

大学受験の参考書の世界でもこのようなセレクション、出版物に関するレビューはかなり昔から(ネットの登場以前から)ある。受験生が実際に自分で使ってみた生の声(出版社のしがらみ・大人の事情一切無し)を後輩のためにレポートしてくれているものだ。

例えば、「英文法の基礎固めなら〇〇出版のこれ」「基礎が出来ている人には〇〇社のこちら」「長文読解メソッドなら〇〇書籍のあれ」のよ

うに、ジャンルもレベルも先輩たちが細分化してくれている。しかも、それぞれの長所だけではなく、「第〇章までは正直ダレる。第〇章からは演習問題が良質。」とか、「私は、七月まではダラダラ解いていました。九月になってさすがにまずいと焦り始めてからこの問題集の良さがやっと分かりました。」のような失敗談もあり、等身大の受験生の姿や、その生活ぶりが伝わってくる。

さて、ここからは、高校入試、夏からの英語のテキストベストセレクションの話。英語に関しては、毎年、不動の三冊が決まっている。私が、いや、我々が選んだのではなく、君たちの代々の先輩たちが口々に語ってくれるのだ。『夏テキ』『過去問』『長文副教材』の三冊だ。

中でも特記したくなる一冊がある(実は、特記すべきではない、という葛藤もあるのだが)。

それはジワジワ効いてくるらしい。ある日手帳えを実感し、「続けてきてよかった。予感はある本だったんだ。」と自分の努力を誇りたくなるときがくるようなのだ。毎年夏の終わりに(または2学期の半ばに)、もしかしたら我々教師以上にそのテキストに愛着を持って語ってくれる生徒が出てくる。『長文副教材』がそれだ。

一ページ、一ページ丁寧に、英文の構造を理解しながら、ストーリーの流し読みではなく、

一文ごとの、一フレーズごとの正確な和訳をきちんと書き残して精査していくテキストだ。

あえて繰り返す。丁寧に、一文ごとに、構造を理解して、日本語訳を書き残して、その訳の精査をするテキストなのだ。従って緻密に訳を書こうとしない人、英文の構造を理解しようとしていない人にはその魅力と価値は分からないだろう。



葛藤する理由がここにある。

これまで和訳で手を抜いていた人、構造の理解から逃げていた人は、ラクに成績を、現実を変えられると思いがちだ。そのような人たちに、「これは特筆物ですよ。」という、なぜか結果もすぐ出ると捉え、その期待だけが膨らんでしまうからか、粘りも格闘もしていないくせに、「うへえ、大変だあ。」「うはあ、やっぱだめだあ。」となりがちなのだ。

この『長文副教材』は各章に締切を設定している。一定期限内に一定量に本気で取り組むことで勉強の熱量が上がり、考察も深まり、効果も生みだせるのだ。

先の受験参考書レビューの話に戻る。「問題集Aはここが良かった。問題集Bは先輩の言う通りここが良かった。でも一番大事なのは、きちんと一冊をやりきること、しかも何度もや

り抜くことだ。」「それぞれに一長一短がある。大事なものは、やるかやらないかという自分の姿勢だ。」と締めくくるレポートは多い。当然夏休みの大切さを説くものもつと多い。「私はこの問題集を夏だけで〇回やり込みました。」というものだ。試されているのは自分の姿勢だ。

夏はいつまでも居座るふりをして、ある日その姿を消してしまう。美りの秋が迎えられますように。
(五日市)

子育て奮闘記③

子育て奮闘記も第三弾。いよいよ、次女の登場である。

次女は、妻のおなかにいる時から、長女のりんご病や震災の帰宅難民など、多々の苦難を乗り越え出産までこぎつけたものの、最後の最後で逆子となり、必死の説得もむなしく、帝王切開での出産となった。

次女を授かったことは、まさに家族の絆というものを感じさせてくれ、彼女には絆を結びつけてくれる存在として「結」の文字を名前につけた。

元気に登場した彼女は、すくすくと育ち、もうすぐ二歳になろうとしている。

長女とは七歳、長男とは四歳年が離れており、姉の宿題に落書きをしようが、兄のお絵かきを

破ろうが、「もう、しょうがないな」と怒られ
もせず、それはそれはお姫様のように可愛がら
れる次女。

子どもたち三人を見てみると、同じように育
てていても、興味をもつこと、得意なこと、苦
手なこと、それぞれ違うことに驚
かされる。

よく保護者の方から、「上の子と
同じように育てているのに、どう
して下の子は……」というご相談を受ける。



まさに我が家でも、同じ悩みを抱える。長女
は国語全般が得意だが、算数は苦手。長男は、
なかなか文字に興味を持たない反面、数字が好
きで、足し算などの問題を出してほしが
る。

先日も、長男は名前を書く練習をするが、い
つも後半が書けなくなる。そんな時つい、「お姉
ちゃんはとつくに名前書けたのに」などと、余
計なことを言ってしまう。

そんな比べられ方をすれば、言われた側だっ
て面白くないことは分かっている。

しかし、上の子での経験があるがために、下
の子が順調な成長をしているか、ある種の目安
として、きょうだい同士を比べる発言をし
てしまう。いくらきょうだいといえ、比べるの
は良くない、そんなこと百も承知だ。言った後
で反省することもしばしば。

また、あえて比較する発言をすることもある。
長男が足し算をしている時、「凄いな、お姉ちゃ
んは五歳の時に、そんな計算できなかったよ」
と長男に言う。長男は満足げに、もつと問題を
出して誇らしげ。一方の長女は面白くない。
そこで長女には「でも字を書けるのは早かった
もんね。本を読むことだって凄く上手だしね！」
と耳打ち。長女の機嫌も直る。

苦手なことにも、もちろん積極的に取り組ん
でほしいが、得意なことは大いに伸ばしてほし
いとも思うのである。

子どもにはそれぞれ個性がある。その個性を
大事にしなから、子どもの一番の味方として、
子ども自身の成長を見守るのが親の役目であり、
そうして親自身も成長していけるのかな、と思
う。

親が口うるさい理由③

(森)

●親が子供に特別な社会的成功を強く望んだら、
子供はどうなるだろう。具体的には、プロ野球
選手、Jリーグの選手、歌手、作家、ピアニス
ト、画家、オリンピック選手、会社経営者、発
明家、政治家……。

『どれでもいい、とにかく一流になれ。』『好き
で、自分に合ったものを見つけ、死ぬほど努力
して、一流になれ。』

●テレビや書籍では、特別に成功した人が、「夢
をもて」「あきらめるな」と語り、



逆境の中で、いかに努力をした
かを披露する。感動的であるし、
鼓舞される。その日から、はり
きって、部活や勉強や習いごと
に打ち込む人も
いるだろう。

●さて、親や有名人から、上記のようなことを
言われて、その通りに行動できる子供がどれく
らいいるだろうか？ いやいや、そもそもやりた
いことが見つかる子供がどれくらいいるだろう
か？ 子供の側にたてば、上記のようなことを求
められたとき、本当に耐えられるのだろうか？

●確率としては、ものすごく低い。おそらく、
0・001%。いや、もっと低いかもしれない。

親とすれば、その0・001%にかけて、自分
の大切な子供を育てることなどできない。そし
て、親もそれなりに世の中を渡ってきているの
で、自分の子供が特別な成功を収められるかは、
かなりの確率で判断できる。結果、親が望むの
は、自分の体験に基づいた「誰でも一定の努力
をすれば得られる可能性の高い成功」というこ
とになる。前号で書いたが、「〇〇に就職しまし
た。」という若者に、大人が「よかったね。これ
で安泰だね。」と答えるのは、まさに「一定の努
力をすれば得られる可能性の高い成功」の典型
例だからである。

●さて、親の側の体験であるが、これは非常に
尊いものである。そして、その尊さは子供には
分らない。せいぜい、子供自身が就職できて
働くことや世の中の仕組みを理解したとき、や
つと分かり始めるといふ所だろうか。

●大半の親は、自分に何が向いているのかはよ
く分らなかった。熟慮を重ねて、或いは何とな
く、或いはそれしかなくてその仕事を選んだ。
とにかく、何かをしなければ生きていけないの
だから。働く厳しさを知り、世の中のことを知
り、人間の善い部分も悪い部分も知り、その過
程で、幸いな人はある実感をもつ。仕事を通し
て、自分は他の人にある程度役にたっているよ
うだ。職場に自分を待っていてくれる人がいる。
一緒に働いて、学生の時とはまた違う連帯感を
味わえている。この仕事が一番向いているかど
うかは分からないが、不向きではない。自分な
りに何か工夫をして充実していけそうだ……。
何より、この仕事で一定の収入を得られる。家
族をもててそれなりの生活も維持できる……。
幸いな人と書いたが、勿論働
く人全員ではない。五割ぐら
いだろうか、いやもっと低い
かもしれない。それでも、0・
001%に比べれば高い確率
だ。
(以下次号)
(小林(健))

▼▲継続希望の方へ▲▼
▶卒業や転校等で創学舎を離れた方にも、ご希望があれば創学舎ニュースを無料でお送り致します。
▶在籍していた教室までご連絡下さい。